

▶平成28年度第1回巡検 「秩父巡検」は11月26日(土)開催

◆平成28年度第1回巡検は「秩父」を予定しています。

開催日：平成28年11月26日(土)

集 合：西武鉄道「秩父駅」前(予定)

講 師：伊藤 等 先生(日本地図学会)

詳細はホームページおよび、「ICICニュース79号」(11月1日発行)でお知らせします。

◆「海洋情報資料館」見学とミニセミナーを開催します。

平成28年10月下旬(20日～28日の平日午後予定)、「海

洋情報資料館」(海上保安庁海洋情報部)見学とミニセミナーを行います。海に関する展示や海図制作について楽しく学ぶことができます。日程・集合時間など詳細は9月下旬～10月上旬ホームページでお知らせします。

◆平成28年度第2回巡検は、「三浦半島」バス巡検を予定しています。

開催日：平成29年春(2月末～3月を予定)

恒例のバス巡検は、河津桜の咲く三浦半島・城ヶ島等を巡検します。現在ルートの見直しを行っています。日程などは「ICICニュース79号」(11月1日発行)と80号(2月1日発行)でお知らせします。

地 図 紹 介

第64回 北海道は日本の中心から外国並みに遠いところであった

帝京大学理事 井口悦男

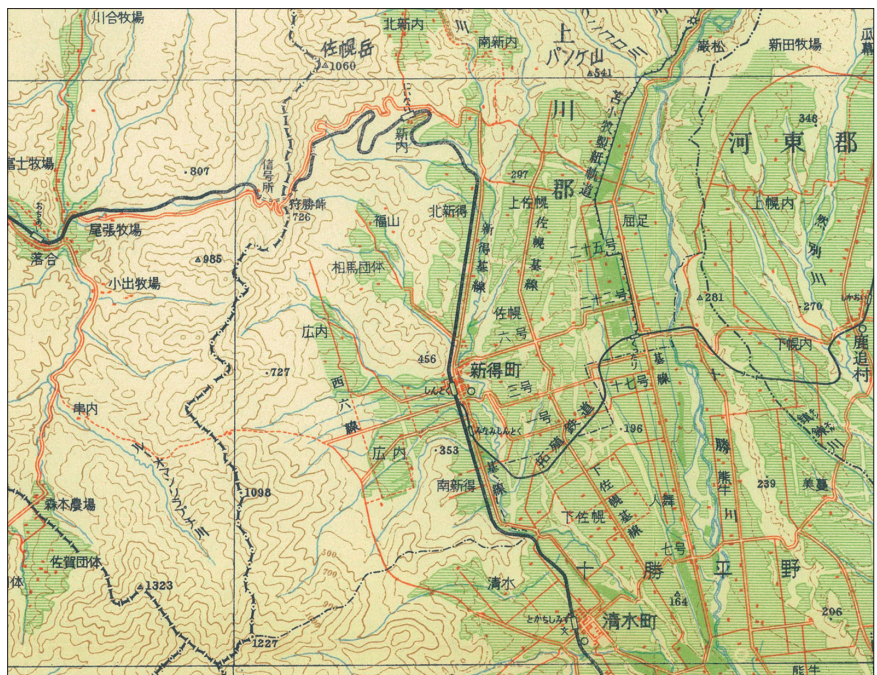
現在、例えば東京から北海道の入口まで、約4時間と僅かで結ばれる近い場所である。

しかし、新幹線の延長以前、あるいは津軽海峡海底トンネル開通以前、青函連絡船利用時には、船を中にして直通せず、3回乗換えを要する場所で、少なくとも2日、さらに道内へは3日はかかる、国内移動にもかかわらず、あたかも周辺外地へ移動するような時間を費やす部分に当たった。

したがって、いま外国各地をめぐっている学生たち身分には、東京、大阪から国内旅行をするにもかかわらず、あたかも外国旅行に参加する気分十分に心得て、九州旅行、そして北海道旅行に旅立ったものであった。旅費に対しても同様に心得てのことで、なかなか国の北端あるいは西端に旅立つには、覚悟が必要であった。おいそれとは、両方面に出るワケにはいかなかった。誰もが、学生身分で暇を埋める

のに思い立つのは、はばかられた。

当時の時刻表を参考にし、夏休みの旅として、再現してみよう。昭和29(1954)年8月号による。なお、東北方面(東北・常磐両線)には、急行までしか存在していなかった。勿論、北海道各線も同様。なお、道内食堂車付き列車として、函館～小樽～旭川～網走間及滝川～釧路間(うち旭川～網走間函館上りの急行、大雪号からの各停移行列車(付き車両)による。



暫定1/20万「夕張岳」昭和25年編集、昭和29年8月30日発行(約83%縮小)
第2次大戦後発行された20万分1図の3色刷暫定版(茶褐、藍、黒)に、平野、台地など平坦面を薄緑刷、道路を赤線、集落地を赤刷とした、北海道中心域数面にのみ加刷の赤が目立つ改良版。正式刷発行直前の試作。

上野発201レ0937→青森着2359 青函連絡船1便0040→0510 函館発11レ各停旭川行0615→黒松内着1045寿都鉄道乗換1055寿都着1155 発1425黒松内着1515黒松内発1610 (605レ各停網走・稚内行) 倶知安乗換1747、5レ1915急行まりも号→釧路着0751 0825発以後各停根室着1212のようとなる。同一列車にもかかわらず、道内の中心域と奥地とで、急行(あるいは準急行)と各停(普通)とに相違させる扱いとなっていたことに特色が見られた。それだけ、辺境と隣り合わせ場所であった。その分、機関車に本州から移動して来た年代ものが使われていた。内地の支線区でなお残存していた混合列車、貨客混合の割合も道内では多かった。

第65回 青森市街を北に見下ろすスキー場の小山 雲谷峠

数ある小さな峰のうち、「峠」と名付けられた青森市街地の南、八甲田山地の麓の小突起を、「山」でも「岳」とも言わないで「雲谷峠」と称する。このような場所を、他には残念ながら、私は知らない。勿論、特別な地形によるとは思えない。その命名由来は知らないが、八甲田

越えの山道沿いの小地名である。

開墾地集落「雲谷」の南で、一段高くなった場所を指す。と同時に、青森市街地一番近くのスキー場である。そして、この集落周辺は、ソバの産地としても知られ、「雲谷ソバ」と称される。ところで、ひとつの想像であるが、峠と名付けられたのは、山越え旧道沿い地名として、田茂木野から先に、「小峠」「大峠」と、小坂、大坂の意味する場所があることに合わせた地名がじつは「雲谷峠」ではなかったかとなると、命名理由が比較的納得しやすい。

また、昭和初年から開通した観光地路線の代表のひとつの、バス路線「八甲田北線」中、冬季無運休部分として、青森～横内あるいは雲谷間があって、冬場、馬そりとの継立場に横内あるいは雲谷が当てられ、人と荷物、特に酸ヶ湯へ湯治客の多数を占めていた、戦前から戦後間もない折まで、道南地域農民自炊客の利用寝具が多く、人は寝具の間にはさまれた形で、どちらから馬に運ばれ、半日以上費した。そして丁度中食地に「萱(茅)野茶屋」が当てられて、お茶サービスを含め、ゆっくりすごせる広場であった。



1/20万「青森」昭和63年3月30日要部修正(正式6色刷) 128%に拡大
青森平野の麓の集落、横内、幸畑から八甲田山中を通っていた旧道は、雲谷峠経由の現在のバス道とは別ルートで、田茂木野から「小峠」「大峠」を経ていた。

春が近づくと、バス路線は少しづつ山を上り延長され、4月1日には例年酸ヶ湯から山越部分の除雪が終わり、十和田湖方面と結ばれた。その間、萱野茶屋まで3月末には除雪の進み次第で開通し、酸ヶ湯に人の影が濃くなることが目立ちはじめたものだった。バス運休中、酸ヶ湯も冬期休業扱いであったが、スキー客などの便宜のため、入りこみ客への扱いはあって、利用はできたが、往復の難儀は、その後もウィーゼルになった位であった。萱野までバスが入ると、近々休業期を了えると、里からの人ツ気の華やぎを肌で感じたものだった。陽光の日増し輝くことから、そして、バスの通らないバス道斜面を、快適に滑り下られる気分良さに酔えることにあった。現在は、ブナ林の中を抜ける楽しさに。